移ろう時間、光と暮らす

家と暮らし

半分は外に開いて光と風を室内に呼び込み、半分は内に籠もって家族と安らぐ。Y さんの家の格子戸は、そんな気を楽にした暮らし方の象徴にもみえる。

地域環境のなかで

富山県高岡市のHさんの家は、南二面に半透明なポリカーボネート製の塀があり、外部からの視線を通さない。光は通すが、夏の強烈な日差しはある程度遮る。中庭を挟んでその塀に面した側には2階まで吹き抜けになったリビングがある。2階部分にも窓を設けたことで、自然な風が部屋を通り抜ける。光を満喫しながら快適に過ごせる空間が生まれた。

この家を手がけた濱田修さんは「富山の古民家をみると、地域ならではの家づくりが見えてくる」という。砺波平野に点在する民家は、1軒ごとに「かいにょ」と呼ばれる防風林を持っている。

この防風林は西と南に植えられ、しかも樹木の種類は常緑樹の杉。「富山は夏暑く、冬は寒くて日照時間が短い。冬でも枯れない常緑樹を植えたのは、南からの日照をあきらめていたからだろう」

こうした地域の自然や、家の周囲の環境との関係こそ、快適な家づくりには重要だと濱田さんは考える。

都会に住む場合、日差しを入れようにも、隣家が迫っていたり、人通りの多い道路があったりと、外からの視線が気になる場合も多い。「そんなときは窓ガラスに直接張るフィルムで工夫してはどうだろう」と濱田さんは提案する。透明から不透明に、上部から下部へと徐々にグラデーションがついているフィルムや、正面は見えるが斜め横は見えないものなど、さまざまなタイプがある。

ブラインドの種類も増えている。外からの視線や日差しを遮りながら、部屋の中から外が見たいという人に人気なのが「厚手のドレープと薄手のレースを組み合わせた商品」(立川ブラインド工業の稲垣可奈子さん)だという。ドレープとレースが交互に並んだ縦型ブラインドの印象は、どこか格子戸に似ている。

光は人工的に演出することも可能だ。たとえば照明を意識的に柱に当てて、机に影を作り出す。「影があったほうが光も際だつ」と、建築家の濱田さんは指摘する。「料理にしても、全部明るく照らすより、一部が影になっていたほうが、奥行きが生まれておいしそうに見えることがある」。「日本の住宅はどうも明るすぎる」というのが、濱田さんの感想だ。

インテリアを扱うヤマギワによると「日本の照明が変わり始めている」という。これまで多くの家では、蛍光灯で部屋の隅々まで明るく照らそうとしていた。「最近はいくつかの場所に光を分散させて配置し、その『足し算』で部屋を明るくしようと考える人が増えている」

もちろん、そのやり方だと、照らしきれない場所も出てくる。

だが、影があるから光も生きてくる。光の揺らぎにそっと寄り添い、陰影のなかに美しさをみる。そんな暮らしもあっていい。

全体を明るくするのではなく、部分を明るくすることで、空間に奥行きが生まれる。上の3枚は充電式のワイヤレスランプを使って卓上や階段を照らしてみた写真。ろうそくのような明るすぎない照明は、控えめだが、温かな空間を生み出す

仙台のIさんの家で、夕方から夜にかけての光の移り変わりをとらえてみた。家は「ゆるやかなワンルーム」構造。明るいところと暗いところが共存している。最後の1枚は明かりを完全に消した状態。青い光はデジタルの時計が発したものだ

右下●富山の砺波平野に点在する民家は「かいにょ」と呼ばれる防風林に囲まれている。風を防ぎ、光を効率的に取り入れる配置になっている　左下●富山の伝統的民家の特徴を生かしたHさんの家。風と光を上手に呼び込む工夫が施されている

格子戸のある家

上●幅5.4メートル、高さ1.8メートルのYさんの家の格子戸。寸法は旅行中に見た秩父の酒屋の格子を実際に計らせてもらった。「格子は外と遮断されないのがいい」。家の中で、前を通り過ぎた子どもの「あ、昔の家がある」との声も聞こえたという　下●伝統工法で造り上げたYさんの家は池袋駅の近く。道幅の関係でクレーンが使えなかったため、すべて人力で造った

仙台市にあるIさんの家は、南側と北側の一面すべてが窓になっている。大きく開け放つと外から心地よい風が部屋の中を吹き抜ける。今年の夏は冷房を入れずに過ごすことができた。

設計した建築家の手島浩之さんは「住む人を気持ちよくさせるのは、部屋を通り過ぎる風だと、家を造り続けるうちに学んだ」と話す。「エアコンの適温は一人ひとり違うが、通気や通風はそういう好みの差が小さいように思う」

Iさん宅は仙台駅から車で15分ほどの住宅地にある。プライバシーとセキュリティーを考えて、周囲は高さ2・2メートルの塀で囲まれているが、閉そく感はない。理由は2つ。ひとつは窓と塀との間に中庭が広がっていること。もうひとつは家の床を半地下のように掘り下げているからだ。おかげで家の中から窓の外を見ると、自然と見上げる形になり、塀の上に広がる空や遠くの木々が視界に入る。「雲や枝の動きで、窓を閉めていても、風を感じる」とIさんはいう。

気配を運ぶ格子戸

東京の池袋駅から歩いて数分の場所に建つYさんの家は、都心にありながら、光と風を感じることができる。

伝統工法で造った木造の一軒家は壁一面が窓になっている。沖縄にあるような開放的な家にしたかった。

都会の家らしい工夫は随所にみえる。窓には雨戸、格子戸、網戸、ガラス戸、障子という5種類の建具を用いた。

Yさんのお気に入りは格子戸だ。格子戸は家の中と外を区切りながらも、光と外気を室内に伝えてくれる。外が明るい昼間は、中から外は見えても、外から中は見えない。そして心地よい風と気配とを室内に運び込む。

繁華街の真ん中にあるため、軒先を通行人が歩き、街のざわめきが聞こえることもある。それでも、酔っぱらいの声もいいものよ」と夫人は笑う。

家とはもともと、荒々しい自然環境から住む人を守るために生まれた。現代の住宅はエネルギー効率を考え、高気密化が進んでいる。それは時代の要請だが、あまりにも外界と室内をかけ離れたものにすると、息が詰まってくる。